

学校紹介

School

「香川漆芸 PR プロジェクト」 クリエイティブ^{セブン}7部の活動

— 地域振興活動の取組 —

香川県立高松工芸高等学校 工芸科 教諭 幸田 成未

1. 学校の沿革

本校は、明治31年（1898年）、「香川県工芸学校」として設立され、時代変遷や学制改革に伴って校名の変更を経て、昭和24年に「香川県立高松工芸高等学校」となり、本年創立127周年を迎えた。創立以来引き継がれていた「自^じ彊^{きやう}して息^{やす}まず」の精神の涵養を柱として、心身ともに健全で、創造力に富み、社会に貢献できる人間性豊かなスペシャリストの育成に努めることが本校の教育の基本方針である。設立当初の学科は彫金科、漆工科、木材彫刻科等であり、その学習内容の一部は伝統工芸の技法として伝承され、現在も工芸科内の金属工芸コース、漆芸コース、インテリアコースの中で生き続けている。その後、時代の要請に応えるべく、建築科、機械科、工業化学科、デザイン科、電気科が設置され、昭和53年には美術系大学への進学を目的とした美術科が併設された。現在、全日制課程には、工業に関する6学科と美術科、定時制課程にはインテリア科、機械科、建築科の3科があり、県都高松の中心部で、ものづくりに関する専門的な知識や技術などの習得を目的とした学習活動を行っている。

2. 香川漆芸と地域振興

香川漆芸は、江戸時代前半の寛永15年（1638年）に水戸徳川家から高松藩に入封した松平頼重が振興に力を入れたことに始まっている。江戸時代末期に玉^{たま}椿^{かじ}象谷が大陸伝来の技法の研究

から独自の技法を創案し、香川漆芸の礎を築きあげた。現在は蒔^{きん}髻^ま、彫^{ちやう}漆^{しつ}、存^{ぞん}清^{せい}、象^{ぞう}谷^{こく}塗^{ぬり}、^{ごとうぬり}後藤塗の5つの技法が国の伝統的工芸品に指定されており、色鮮やかで彫りによる立体的な奥行のある表現が特徴である。

本校の工芸科漆芸コースでは、漆器産業の担い手を育成するとともに、多くの著名な漆芸作家を輩出している。しかし、生活様式の変化や大量生産による安価な生活用品の普及などから、需要の低迷が続いており、香川漆芸の普及と後継者の育成が課題となっている。

3. クリエイティブ7部とは

本校は、全国的にも珍しい漆芸教育の技術や、生徒の若い感性を活かし、地元香川県の漆器産業の活性化を検討した。そして、本校全日制7学科がそれぞれの専門性を活かしながら、横断的に協力し合い、作品制作ができるよう『Creative 7』として同好会を設立し、活動することとなった。まず、香川の漆器産業を活性化するためには、新たな需要を招く商品の開発が必要であると考えた。地元企業や香川漆器工業協同組合を始めとした関係団体等と協働して、「感性価値」を付加し、機能的な価値だけでなく人の心に響く新商品の開発や地域ブランドの活用に取り組んだ。さらに、人材・後継者不足の解消に向けて、子どもたちの教育の機会を活用した体験活動としてワークショップの開催などによる広報活動も行った。現在では『ク

リエイティブ7部』と名を改め、部活動として香川漆芸のPR活動を校内外、県内外問わず幅広く続けている。

4. 作品の開発・制作活動

香川漆器は技法の特徴から制作工程も多く、高価な材料を大量に使用するため、作品の価格が上がってしまう。そこで生徒たちと考えたことは、比較的安価で普段使いができ、手に取ってもらう機会を増やすことで、漆器の良さを発見してもらえる「ちょっとうるし、ちょっとうれし」という考え方である。作品を制作するうえで、レーザー加工機や3Dプリンター、真空吸着ロクロといった機器を使用しての制作を考案し、量産することで価格を低く抑えるよう工夫した。



レーザー加工機を利用した商品の制作

また、漆を塗る素地は木材が主流であるが、陶器や金属、紙、布などを素地とした製法も伝統的な漆芸技法に含まれていることから、それ



高松花市場と共同制作した一輪挿し

らを活かした商品の制作も模索している。そのうち、陶器に漆を焼き付けたタンブラーや一輪挿しの商品化を行い、展示販売した。これらは本校卒業生である陶芸家の方とのコラボレーションで生まれた商品である。制作した一輪挿しは、花市場に勤めている別の卒業生の協力のもと、県内の生花店でのイベント販売も実現し、陶器や花に携わる人々にも香川漆芸を知ってもらうきっかけづくりとなった。

近年は原材料の価格高騰の影響を受けたことから塗り重ねの回数を抑えられるようにアクリル素材やUVレジンなどを活用した作品の開発も行っており、伝統を継承しつつ新しい機材や技術、素材を投入し、新境地を模索、提案し続けている。作品のデザインや制作物といった点では若い世代が「欲しい」と思うものを生徒が意見交換をしながら制作している。



制作作品の一例

5. 広報活動

毎年開催されている本校の一大イベントの「工芸展」での作品展示やPRを始め、校外では「産業教育フェア」やサンポート高松にて開催される「たかまつマルシェ」への出店など、年ごとに様々なイベントでのPR活動を心がけている。昨年は、国の特別名勝である栗林公園で県産品を販売する「栗林庵」や東京新橋にあるアンテナショップ「香川・愛媛せとうち旬彩館」などでの作品の展示や販売も行った。

展示販売される作品は、実に多種多様であ

る。年度の初めにはグループに分かれ、各グループで新商品の開発を行う。それぞれの班が考案したアイデアを発表し合い、その中から制作に適したものが慎重に吟味され、選ばれたものが商品化される。これまでに制作したすべての商品は漆を使用しており、茶碗や豆皿、コースターなどの日用品、アクセサリやブローチなどの装飾品、子どもも楽しめる組み木やヘアクリップ、流行を取り入れたデザインのチャーム、ストラップなど多岐に渡る。それらの商品を展示販売している傍で、来場者に向けて生徒たちが自ら香川漆芸についての説明を行った。

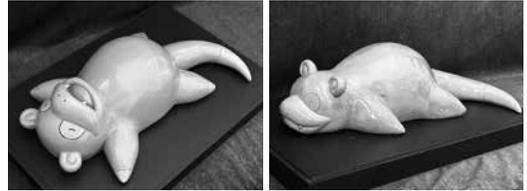


香川・愛媛せとうち旬彩館での活動風景

漆芸と聞けば、輪島塗を想像する人がほとんどだろう。来場者からもそのような声をしばしば耳にし、県外での香川漆芸の知名度の低さを痛感した。しかし、多くの来場者が生徒の話に耳を傾け、香川漆芸やクリエイティブ7部の活動に関して興味を示してくれる場面が多く見られた。栗林庵や旬彩館では、県外や海外の観光客にも商品を手に取ってもらうことができ、より一層香川漆芸の広報に繋げることができた。そして、校外での活動は、生徒たちにとって貴重な経験となった。接客する事に慣れていない生徒たちからは、少々緊張が窺えたが自身の企画、制作したものを来場者の方が手に取り、声をかけてくれることに喜びを感じ、活動に対して前向きに取り組むようになっていく姿が見られたことが印象的であった。時には来場者から

の商品に対する要望や指摘もあるが、それらも真摯に受け止め、次回の制作に生かしている。

昨年度は、新たな取組として香川県知事と株式会社ポケモン最高経営責任者の方との対談をきっかけに立ち上げられた「うどん県×ヤドン×高松工芸高校」の企画で、ヤドンの立体作品を2体制作した。



漆塗りヤドンの作品

株式会社ポケモンは「ポケモンローカル Acts」という活動を行っている。地域ごとに選ばれた「推しポケモン」が地域の魅力を国内外に発信する活動である。その活動の一環として、株式会社ポケモンの監修の元、うどん県PR団として活動しているヤドンの原型の制作や型取りを行い、色彩豊かな香川漆芸の特徴を活かした漆塗りで仕上げた。この工芸作品は「工芸展」や「香川・愛媛せとうち旬彩館」、高松駅に新設された「高松オルネ」などで展示を行った。

株式会社ポケモンと高校がコラボレーションをしての工芸作品制作は初の試みである。生徒たちは、ポケモン社のブランドイメージの理解や著作権と商標の制約などについて理解を深めた。また自由な構想を活かしながら様々な制限がある中で、相互の意見や条件をすり合わせて実現することができた。

展示イベントの当日は多くの来場者で賑わい、中には県外から遠路はるばる足を運んでくる人も見られた。ヤドンをきっかけに足を運んでくださった来場者の方々にも香川漆芸をPRすることができ、より一層広報に繋げることができたことは生徒たちにとっても非常に貴重な経験となった。このような活動は、地元新

聞社やラジオ放送局など複数のメディアにも取り上げてもらうことができた。

今回制作したヤドンは観光振興課や県産品振興課による香川県のPR活動において貸出を行っており、今年度の夏頃には高松空港で展示される予定となっている。

現在は、今回制作に使用した技法とは別の香川漆芸の技法を用いた新たなヤドンの制作を行っており、今年の工芸展にて発表予定である。



RNC ラジオ放送

クリエイティブ7部での広報活動は展示販売だけではなく、子どもから大人まで幅広い年代を対象とし、漆を使った作品を制作する体験型の広報活動も行っている。これまでに、高松空



高松空港でのワークショップ

港近くにある県内唯一の大型児童館「さぬきこどもの国」や「栗林庵」でのワークショップ、近隣にある高校の定時制への出張授業なども実施した。

漆は乾くのに1日以上長い時間がかかることや乾燥していない漆はかぶれることから、どのようにすれば、より安全で即日に手渡しが可能なワークショップにできるのかを教員と生徒で考えた。事前に制作した漆の板である乾漆板をカットしたものをパーツとし、体験者に自由に配置してもらい表面をレジンでコーティングする方法を実施した。本格的な漆の技法とは離れるが、香川漆芸の色彩の豊かさや技法独特の表現方法に気軽に触れられる機会を設けることで、体験者が親しみをもち香川漆芸を知るきっかけづくりに繋がった。

今後は、「高松オルネ」で開催される高松市主催の瀬戸内国際芸術祭に関連するイベントでワークショップを実施する予定である。

6. おわりに

これまで香川漆芸の広報活動に努めてきたクリエイティブ7部であるが、生徒たちの活動の場は、多くの方々のお力添えのもとに実現されているものであると感じている。制作、販売などを通じ、他者と関わることで、生徒たちは制作の先も視野に入れた制作を行うことができ、ものづくりの奥深さに気づくことができている。また、経験を活かし多角的な視点でものづくりを考えることは、未来を担っていく生徒たちにとっての強みになると感じている。今後も生徒たちにとって実りの多い活動が展開できるよう、より一層努めていきたい。

工業教育資料 通巻第418号
(10月号)

2025年10月5日 印刷
2025年10月10日 発行
印刷所 恵友印刷株式会社

© 編集発行 実教出版株式会社

代表者 小田良次

〒102-8377 東京都千代田区五番町5番地

電話 03-3238-7777

<https://www.jikkyo.co.jp/>